

被衣の構成と意匠

木曾山 かね*・藤本 やす**

(昭和59年10月11日受理)

Construction and Design of the "KATSUGI"

Kane KISOYAMA and Yasu FUJIMOTO

(Received October 11, 1984)

はじめに

被衣の史的考察は別に述べたが、本学生活資料館所蔵の6枚の被衣の構成と意匠について調査し、衿肩明きの位置の違いなどをみるための実験も試み、史的考察と共に時代考証などを推論することを目的とした。

研究の方法

実験及び調査の方法は次の通りである。

- イ 被衣1枚ずつ寸法の測定を行った。
- ロ 色彩・布地・紋様など意匠について観察を行った。
- ハ 縫製方法について観察記録し、比較した。

表1 被衣の寸法

名称		記号	A	B	C	D	E	F
袖	袖 丈		63	44	47	43	40	40
	袖 口		23	23	23	20	23	23
	袖 付 け		25	袖丈と同じ	袖丈と同じ	袖丈	袖丈	袖丈
	袖 幅		30	33	30	31	31	33.5
身	丈		151	147	155	150	138	138
拵	丈		59	64	59	59	59	61.5
衿 肩 明 き			8	7.5	7.5	7.5	7.5	6
衿付け前繰り越し			なし	6	9	9	9	15
肩	幅		29	31	29	28	28	28
後	幅		29	31	29	28	28	28
前	幅		24	25	24	24	23.5	23
衤	幅		14	15	14	14	14	15
合 褌	幅		10	13	14	14	12.5	13
抱	幅		23	23	23	24	23	23
衤 下 が り			35	18	20	17	17	19
衿 下			80	65	72	50	48	58
衿	幅		11	14	14	15	14	14
袖 丸 み			2	5	10	10	10	10
覚 え 書 き			紅練絹	熨斗目文様 練緯	肩に菊 桐小紋	肩に横段小紋 麻	肩に菊 総文様 麻	紹熨斗目 脇に乳がついている
備 考								

* 第2被服構成研究室

** 第1被服構成研究室

ニ マネキン人形に各々6枚の被衣をかけて観察した。更にこれを撮影し、考察の対象とした。北村氏¹⁾によれば、「被衣の着ようは右の袖を頭の上に折りかけ、その上へ左の袖を重ねるようにするもので、見えぬように針をさして止めてもよい。」とあったが、本実験では、衿肩明きが前に繰り越した寸法の違いの状況を観察する目的であるから、図5のように頭に被せて両袖は自然にたらしたまゝとして、袖は頭上に折りかけず撮影したり、観察したりした。

撮影は資料6枚の上半身前向き、横向き、後向き、全身の前向き、横向き、後向きについて行い、合計36枚である。

実験及び調査と観察の結果

1. 被衣の寸法

6枚の被衣の寸法を示すと表1の通りである。

・Aは袖丈が63cmで最も長く、袖付けが25cmで振りが

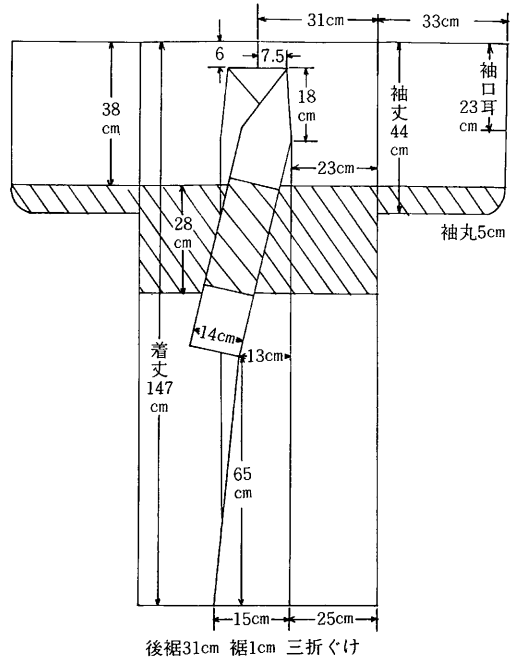


図2 ② 羽二重練緯熨斗目文様の被衣

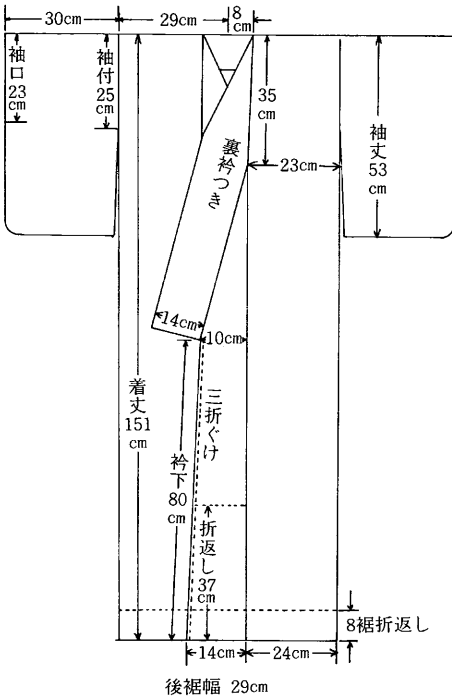


図1 ① 紅絹の被衣

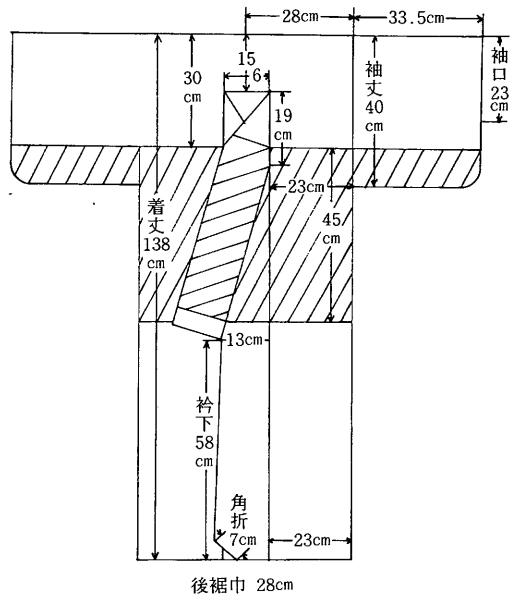


図3 ③ 絹紹熨斗目紋様

ある。

- 他は袖丈、袖付けが同寸である。
- Aは身丈も2番目に長い。最も長いのは155cmである。
- 被衣は肩で前に繰り越しがあるが、Aにはない。繰り越しは6cm、9cm、15cmである。
- 衿下がりがAは35cmもある。他は20, 19, 18, 17cmなどである。
- Aは袖の丸みが小さく2cmである。他は5, 10cmなどである。
- Aは衿下が80cmもある。他は72, 65, 58, 50, 48cmなどである。

2 出来上がり図

6枚の被衣の内、肩より前に繰り越しのあるBとF、繰り越しのないAの3枚は、縫いやその他にも特徴がある所から出来上がり図を示した。表1と対比しながら参照されたい。

3 縫製について

縫製の部分部分を観察すると若干異なるので、表2に示すように、袖口、衿裏、衿先、裾の仕末、衿付けの仕末、脇縫い、背縫い、袖付けなどを記録した。

イ 裾ぐけ 何れも完全に仕末がなされている部分である。三つ折り寸法が若干差があり、Aは8cm、Bは1cm、CDは0.5cm、EFは1.5cmなどである。

ロ 衿付け 縫い方がまちまちで、Aは其の裏衿がついており、Bは後からつけられたのか、赤いモスリンがついている。その他CDEには、裏衿はつ

表2 縫製について

記号	袖	袖口	衿裏・衿先	裾	衿	脇縫い	背縫い	袖付け
A	三つ折りくけてある		共の衿裏がついて いる	8cm折り返し くけてある	衿は折り返し37cm 縫い代は耳くけ	3cm位 とじなし	1cmに縫って ある	0.5cmの縫い代で 縫ったまま
B	耳のままである		モスリンがついて いる	1cmの三つ折り くけてある	衿付けの縫い代は 多いがそのまま	0.5cmの縫い代 とじなし	0.5cmの縫い代	3.5cm縫い代があり、現代の 袖付けと同じよう身頃を折 りつけしてある
C	同上		裏なし 先三つ折り	0.5cmの三つ折り くけてある	衿付け縫い代0.5cm で縫いはなし	0.5cmの袋縫い	0.5cmの縫い代 で縫ってある	1cmの縫い代
D	同上		裏なし 先が三つ折り	0.5cmの三つ折り くけてある	細い袋縫いが してある	0.5cm 縫って割ってある	0.5cmに縫って ある	0.5cmに縫ってある
E	同上		裏なし 衿先裁ち目のまま	2cmの三つ折り 衿先が三角に 折ってある	衿付けの縫い代 そのまま仕末してない	3cmの縫い代 そのまま	1cmの縫い代 で縫ってある	2cmの縫い代で 縫ってある
F	同上		裏なし 衿先10cm折り返す	1.5cmの三つ折り 衿先が三角に 折ってある	同上	2cm位の縫い代 仕末なし	0.8cmに縫って ある	2cmの縫い代で 縫ってある

表3 被衣の素材・色・紋様

記号	素材	地色	紋様	柄その他
A	練絹薄地	5R $\frac{5}{12}$ 薄紅	無地	
B	練緯(ぬき)羽二重	5PB $\frac{1}{2}$ 濃なす紺	熨斗目	白地に墨絵の風景柄
C	麻薄地平織 1cm 20本打込	5PB $\frac{3}{4}$ 同上	総文様	衿肩より11cm下がりに直径43cmの菊の花 紺地に白の桐小紋
D	麻薄地平織 1cm 20本打込	灰味青 あいねず	横段4段 小紋柄	衿肩を中心にして直径40cmの丁字の花 灰味青地に花と扇面 灰味青地に菱つなぎ 灰味青地に小紋 灰味ゴールド松葉梅紅葉 にふい緑に流水と花 雲形に50cm下宝くずし小紋
E	麻地 1cm 15本打込	5PB $\frac{1}{2}$ 濃なす紺	中型	白く菊と唐草文様中型 肩を中心にして、直径50cmの菊の花
F	絹縹 1cm 22本打込	同上	熨斗目	松皮菱つなぎ 白、灰味青、ブルー

ていない。Fには衿先のみ裏がついている。

ハ 衿付け Aは衿の裾が37cm折り返されて止められている。(図1) Dは袋縫いで縫い代は0.5cm、他は縫合され仕末されていない。

ニ 脇縫い ABEFは仕末せずそのままである。Cは0.5cmの袋縫い、Dは0.5cmの縫い代を割っている。

ホ 袖付け ABEFは縫いつけたまま、Dは0.5cm縫いつけて割ってある。

4 着装について

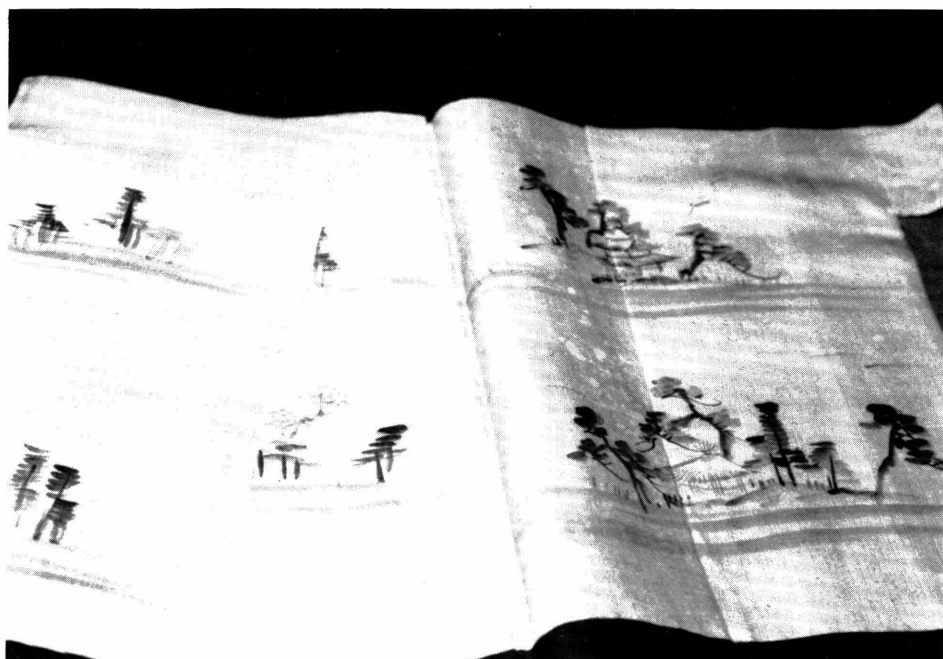
史的考察は先に述べたので、ここでは、実物の採寸結果及びマネキンに着装させた観察結果の考察を進めてゆくこととした。被衣の素材・色・紋様は、図4・5、表3に示す通りである。

A 被衣の色形について、Aは薄紅の薄地縹である。被衣は大袖から小袖をかざくようになり、白色より単色へと変化し、更に単色より多色へと移行した歴史的推移から、Aはその間のものと考えられる。更に衿肩回しも前へ繰り越さない小袖のままを用いたものとして、これをマネキンに着せると後ろ裾が上がり、脇裾も後ろが上がり、前裾も開いてしまう。

袖付けは25cmで振りがついていて、袖丈も長いので良いように考えられるが、被衣の顔をできるだけ隠そうとする目的からすると一番顔がでる。これはAの場合、衿下がりが35cmもあり、そのため布幅のゆとりがないためであろう。

B 熨斗目紋様、練緯である。前へ衿肩明き6cm繰り越しているので、着装すると落ち着きがよい。袖丈も64cmあり広く形良い。

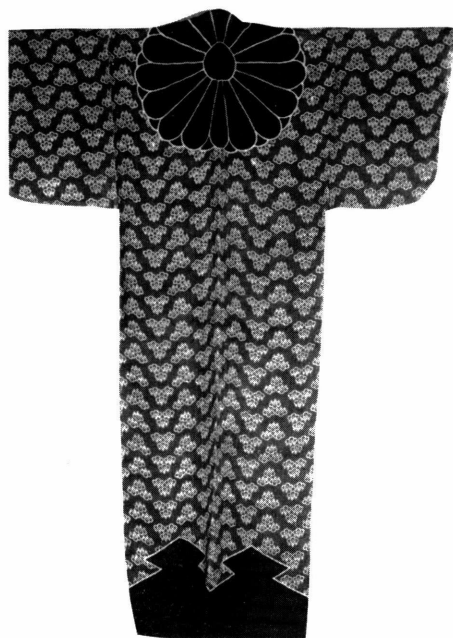
CDE 頭に大きい菊の花や丁字の花がある。この花が頭の頂点にあたり、衿肩明きは前に9cm繰り越している、被ると最も形良い。明暦の頃には、女中まで麻のかざき云々とある。Dは麻衣であるが小紋も美しく、横段小紋でもあって御所風ともみえ、町家の富裕な女房の用いたものとも考えられる。CとEは麻地で、肩に菊や丁字の大きい花があるが、これからは庶民のものと考えられる。北村氏¹⁾によれば、「この御所被衣に対して、庶民に用いられてきた被衣は仕立の上では通常の単衣と変わりませんが、生地が麻で、それに型染で色々な文様を染め出し、配色も藍の濃淡や、萌黄、茶、薄黄などバラエティーに富んでいる点に、また背の襟から肩にかけて、



⑧ 練緯（ぬき）熨斗目紋様上下なす紺地



⑨ 絹緞松皮菱の熨斗目紋様なす紺地



⑩ 麻地衿肩に桐小紋裾松皮菱風

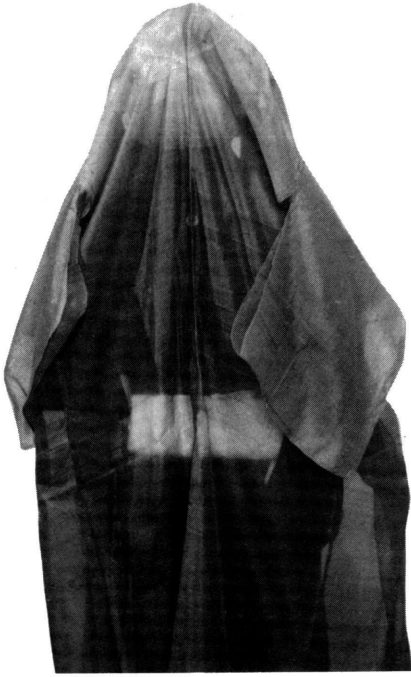


図5 5-1 ㉑ 衿肩明は肩山にある



5-2 ㉒ 衿肩明は肩山より前へ6cm繰越



5-3 ㉓ 衿肩明は肩山より前へ9cm繰越



5-4 ㉔ 衿肩明は肩山より15cm前へ繰越

大きく菊花や梅花、松皮菱などを染出しているところに特色があります。御所被衣の場合は髪に被衣止めという笄を差し、それに被衣をかけるようにしましたが、庶民は両手をあげて被衣を支えるようにしていたようです。」

F 衿肩明きが前に繰り越している寸法は15cmで最も多く、被った姿は後ろ裾のつれ上がることもなくて安定している。更にFについて特記すべきことは、裾より63cm上がった両脇縫い目に、3cm程の乳布がついている。これは着用してから、美しい打ち紐をこの乳に通して前で結ぶと、風などで後ろへ裾の乱れることを防ぐことができるための工夫であろうか。そして又、後ろ姿もすっきりする。

被衣の目的の一つである外出時に顔を被うということを見ると、このFは、衿肩明きが肩山より前へ15cm下がっており、ゆとりが充分にあるため、顔が前向きの姿では一番によく隠れる。図5-4の後ろ姿でも、他の三つよりゆったりとゆとりが感じられる。

結 び

考察を進めて来た6枚の被衣について次のように推論することができる。

Aは、衿肩の繰り越しもなく、袖の仕立て方法も普通の小袖の様で、衿の仕立てもこれを物語っている。6枚の内では最も古く、被衣の始まりの頃のものと考えられ

る。

Fは、衿肩の繰り越しが最も多く、脇縫いに乳などもついている。最も新しい被衣で、着用禁止令の出る頃のもので、1770年代のものと考えられる。

BとFは熨斗目紋様で、御所風の被衣である。

Dも横段小紋で、仕立ても丁寧であり御所風である。

Cはなす紺と白と黒であり、総文様であることなどから、富裕な町家の主婦の用いたものではないか。

Eは麻も粗く、仕立ても粗末である。公家の女中も被衣を用いたというので、Eは公家の女中の被衣であろうかと推論をした。

謝 辞

本稿を終わるにあたり、写真撮影他研究の資料作成に御協力下さった生活資料館事務長石垣宏氏、その他に協力して下さいました生活資料館のスタッフの方々の一ヶ年有るに亘る御協力に深く感謝したいと存じます。

引用文献

- 1) 北村哲郎：げんりゅう14, 3～5, 1982

参考文献

- 井筒雅風：原色日本服飾史，光琳社出版KK（京都）1982, p.138 140 164 218